

---

# 雪景色

べあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪景色

### 【Zマーク】

Z3510D

### 【作者名】

べあ

### 【あらすじ】

中3の冬、始めてあつた隣の中学校の男子文也生徒が忘れられない歩高校になつて運命的な出会いをしたが実は文也は・・・?!

## 第1話

真っ赤に色づいた葉も枯れ始め少しづつ  
ゆっくりと冬に近づいてきた11月の始め

中学3年生の冬

みんな受験勉強と必死に格闘中の  
ただ1人

受験なんて関係ないとでも言つように  
外の灰色の世界を眺めている女子生徒が1人いた・・・

彼女の名前は、

佐古田歩

『こら佐古田！受験生にぼーっとする時間なんてないぞー！』

「先生・・・だつて、外の景色超綺麗なんだもん・・・」

『受験生に綺麗も何もない！そんな暇があるなら、帰つて勉強でも  
しふーー。』

「はいはいはい！  
じゃセンセーさよーならー」

わざとらしく大げさに言つて

隣にいた男教師から、

怒鳴り声を浴びさせられながら帰ったのは、いつまでもない・・・

「あーもー本当サイアク耳超痛いー

彼奴の声デカすぎだし！－」

そんな文句を言いながら霜柱を割つているとき

「痛ツ！－！」

後ろから、男の声がした  
歩が振り返つて見ると後ろには、1人の男が地面に尻もちをついていた

それは、よく見ると隣の中学校の制服を着た黒縁眼鏡の男子生徒

うわ・・・

転んでるよだつさー

てか、前髪長くてこわー

絶対虐められてるなーこの人

なんて勝手な推測をしながら

歩はもう一度チラッと後ろを振り返つた

その時

「あ

目が合つた

でもそれ以前に驚いた事が一つ

ええええ？！

眼鏡はずしたら超かっこいい！！！

目を疑うような変身ぶりに歩は固まってしまった

「…………」

2人の間に氣まずい雰囲気が流れ

歩がその空氣に耐え切れずついに話かけてしまった

「だつ・・・・大丈夫ですか・・・・？」

「あ・・・・うん」

男子生徒は、驚いた顔をして歩を見る

「え・・・・アタシ何かおかしい事言つた？」

「いついや・・・別に」

男子生徒は、歩から目を逸らし落ちた鞄を拾つてずれた眼鏡をかけ直した

うわー

人ってこんなに変わるもんなんだなーと

感心しつつ歩は、前を向き直して歩き始めた

「ただいまー」

「あ!

お帰り歩、今ちゅうひじい飯できた所! 今日は歩が好きなスペゲティ  
一 む」

「本当へー・やつたあー」

歩には、父親がいない、亡くなつたとかやーゆつの訳ではなく  
歩の父親は歩が出来たと知つて逃げたのだ歩と歩の母を残して・・・

・

「歩ー? お母さんね、歩に話しておくれ事があるの・・・」

「えー何? ?

歩は、スペゲティーをほねばつながら不思議そつな顔をした

「お母さんね?

歩が高校にはいったら、再婚しようといふの・・・・・」

「え・・ー?」

歩は、前々から自分の母に再婚を勧めていたのが  
これやうなると少し寂しこもした

「あ、あたしは、良いと思つよ……？その人お母さんの事幸せにしてくれるんでしょ？？」

歩は、お母さんに迷惑をかけては駄目だと思って笑顔で言った

「もちろん一時田さんて人なんだけどねとーても優しい人なの」

「やつが・・・それなら安心させになつてね」

「あと一つ時田さんにはね？歩と回り年の息子さんがくるの」

それは、さりに歩を驚かせる事になつた

「む、むわ！」…」

「それで、歩も時田さんの息子さんも受験生でしょ？  
だから、受験に集中してもうつ病にあなたたちが高校生になつたら  
逢わせよ」と思つの……」

歩は、もう声もでなかつた

「あ・・・歩？こんな事急に言われても驚くに決まつてるわよね……」

「

「あ・・・えと、」

歩は、やつと口を開くことができた

「歩には、色々辛い思ひさせちゃつたわね  
でも、これからは、大丈夫よ」

歩の母は、幸せそうに笑みを浮かべた

お母さんの事ぢやんと祝福しなきゃ

歩は、このときお母の笑顔を前にして「つ決意した

\* \* \* \* \*

桜が咲き乱れ何もかもがびんく色の春

「歩高校合格おめでとうーーー。」

歩は、無事志望していた高校に合格した

「ありがとうございますお母さん」

「もう、高校生なんだから、しつかりしなさいよー。」

「はーはー」

歩は苦笑いで答えた

「もう、歩も高校生か・・・そろそろね

歩は、息を呑んだ

【受験に集中しても、ひつ connaît あなたたちが高校生になつたら逢わせ  
よつと思つの・・・】

中学3年の冬に言われた言葉が蘇つてきた

「歩、入学式が終わつたら、すぐ家に帰つてへるのよ?? 時田サン  
達とお食事に行くんだからー。」

「はーいーじゃあー行つて来まーす」

歩は、笑顔で玄関を出て行つた

「ひわー桜綺麗ーーー。」

駅に向かう途中満開の桜を見て歩は、田中をキラキラさせた

「綺麗・・・」

後ろから男の声が聞こえた

歩がふり向くと

「あ」

あの時と同じ光景

中3の冬あの隣の中学校の制服を着た眼鏡男子・・・・・

「あの時の・・・・」

歩は、実はあの時からこの男子生徒の事が忘れられないでいた

「え・・・ヒアタシの事覚えてる?..」

「は?..」

田の前の男子生徒は、不審者を見るような田で歩をじっと見てくる

うつそーアタシ今めっちゃかつこ悪いーーー!

顔が真っ赤になるのが自分でも分かった

「ふツ」

え・・・今笑われた?!!

「お前の顔桜と同じ色してん」

太い黒縁眼鏡の下の澄んだ瞳、色のついていない自然な髪

あ・・・やつぱりかっこい、歩は見とれてしまっていた

「あ、やつべもっ始業式始まる・・・」

そういう残して田の前の男子生徒は、走り去ってしまった

あ・・・行っちゃった

て――――――!

アタシも遅刻じゃん――――!

「あー やばい電車に乗り遅れる――!」

歩は、必死に走った、普段運動なんてしないから本当死ぬかと思つ  
ぐらいに

そして見事に電車のドアが閉まる瞬間滑り込みに成功

やべ、アタシやればできんじゃん――!

「ふツ」

また、あの時と同じ笑い声が聞こえた

え・・・・・？？

「今の滑り込みは、凄かつたな」

さつきの男子生徒！！

「同じ電車・・・・？？」

「そうみたいだな、それか、お前は俺のストーカーか？」

彼がニッと笑う

「／＼／＼

アタシは、彼の笑顔に弱い

「また、お前の顔桜色してゐる」

「！？」

「本当に歩いて面白い奴だな」

え・・・・?

「なんでアタシの名前・・・」

「あッやべ・・・今俺・・・」

「あなた何でアタシの名前知ってるのー?」

「なッ・・・・・

なんとなーく?/?」

彼の目が明らか泳いでいる

「本当の事言つて!」

「・・・・・ああな

「はあ?

何か、隠してるでしょーもしかして、あんたアタシのストーカー?

「!

「んな訳ねーだろー!」

何でお前みたいな奴をストーカーしなきや いけねーんだよ勘違いも  
いーかげんにしろや!!!

・・・何なのこの男?—めっちゃ腹立つーーー!

「このストーカー男！」

# 「この勘違い女！」

「あー、あの時もアンタいたわよね！……中3の冬から、アンタアタシの事ストーカーしてるでしょ！」

「はあ？何の話してんの？！」

「中3の冬アンタ雪道でコケてたじやない！..」

「あ  
ツ  
！  
！  
！

思いだしたぞ！あの時俺の事じーつと見てきた奴だろ！

「いーやーツストーカー！！！」

「つせーな！ストーカじやねーつづーの・・・  
て、あつ着いた！」

俺の手でおつるナビくわべれもつこへんなよーーー。」

「誰が、ついてくもんですか！」

ん・・・この駅

アタシが降りる駅じゃん！！！！

「 ッ！？

「しょうがないじゃない！アタシも」」で降りるんだからー。」

「この勘違いストーカー女っ！」

「うむ、わたくしも！」

＊＊＊＊＊

「お前どいつもこいくんだよーーー。」

「それは、じつちのセリフよーーー。」

「俺二二の高校だから高校までは、まじつこいくんなよストーカー女ーーー！」

・・・そこには、アタシが今日から通う塔ヶ丘高校の文字

「あ・・・・・アンタまさか、塔ヶ丘高校・・・・・?」

「え・・・・まさかお前もーーー?」

「アンタ筋金入りのストーカーねーーー。」

「ばっちは、じつちのセリフだーーー。」

「アンタのせいで入学式から遅刻したじゃないーーー。」

「その言葉そっくりそのままお前に返すよーーー。」

ツ――

なんなのこの男――アタシは、こんな男にあつとじめこいたわけ  
?!?

「うわーお前のせいで終わったじゃねーか――」

「アタシのせこしないでよーもとむとまアソタのせこでしょ  
――！」

つて、アンタまさか、D組じやなこでしょーね――?」

「は?

D組だけど、お前なんで知つてんだよ――」

「いや――アタシと回じクラスにまでなつて向かぬ氣よ――」

「は――お前もまさかD組?――」

歩は、涙目になつながら、コクンとつなづくへ

「まじかよ・・・」

『 いりーさんの一年生自分の教室に早く戻れ――。』

「やべ教室早くこかねーと――」

ガラツ・・・――

「…………」

まずこの空気…………

そりやそりよね入学式に遅刻＆男と一緒に登校だもん…………

「えと遅刻2人組早く自分の席につけー」

よかつた、担任が優しいおっさんで……

『えーこれで説明は、終わる15分間休憩しろー』

ああ・・・

アイツのせいでアタシの薔薇色の高校ライフの第一歩がめちゃくちゃになっちゃったじゃない！！！

「佐古田サン・・・・・・?？」

田の前には長い髪が印象の綺麗な女の子がたつていた

「歩いてよんでいい?？」

彼女は、笑顔でアタシを見てくる

「全然良いよ」

アタシは、普段人見知りをしないほうなので結構友達は、すぐ出かける方だ

「私の事は、美奈って呼んで？？」

「美奈ね…これからよろしくね」

それからアタシは、何人も女友達ができた

「それじゃあ、また明日ねつ！」

「歩ーこれから、みんなで遊び行くんだけど来れるー？？」

「あツごめーん！

アタシ今日大事な用あるんだ！」

「そつかあーじやあまた明日ね」

そういうて、アタシは家へと向かつた

\*\*\*\*\*

「あつ赤お嬢つー」

「ただいまー

あ一つかれた・・・」

「今日どうだつた?」

「友達は、たーべれんできたよ

あーでも、今日腹立つ男にも会つたーーー。」

アタシは、今日あつたストーカー男の事をお母さんに話した

「あひー面白こ子じやないお母さんも会つてみたいわー」

「本当に腹立つんだからッ .....」

「せこせこ、

ほひ歩準備しながに時田さんとの約束に送れかや!ひじやない」

「はーー」

「…………時田さんまだ、来てないみたいだね」

高そづな高級レストランお母さんも綺麗に化粧をしている  
お母さんもまだ、32歳全然女として劣つてないんだなと歩は、感  
心した

「晴子さん！！」

奥の方から、男の人が来た歳は36歳ぐらいの人でとっても優しそ  
うな顔をしていた

「正人さん ッ！！」

「「めんごめん！仕事が長引いちゃって！  
あ、始めまして歩チャン！」

「始めまして・・・・・」

歩は、できる限りの笑顔であこがれをした

「正人さん、文也君は・・・・？？」

「あー文也なら、もうすぐ来るよ  
あー来た来た文也～～！」

時田さんの視線を追つてくとそこには

誰か嘘つて言つて・・・・・

今朝のアイツ・・・

「嘘でしょ・・・・・?」

「文也あこやつしなれど、春子サンと歩チヤンだよ」

「始めまして……」

アタシは、口をポカンと空けて動く事が出来なくなってしまった……

「文也君始めまして、こちら歩も挨拶しなやう……」

「…………」

アタシは、ふてくされた子供のよつた声で挨拶した

なんで「ハイ」は、こんなに冷静でいられるわけ？！

「うーん、歩何よその態度わッ……」

「別に良こですよお義母さん」

今朝の時は、正反対の笑顔で答える

「あら、文也君は優しい人なのね」

この猫かぶり魔王 ッ!!!!!!

「実は、歩チャンと文也は同じ高校なんだよ」

「んな事は、よく知りますよ！」

アタシは、そう言いたいのを抑えて必死に作り笑いをした

「やうだったんですか？！歩チャンこれからよひしくね」

「は シ！？？」

今朝会つたばかりじゃない！それなのに何よ初めて会つたみたい  
に ツ！！

「文也君は、礼儀正しい子なのねー」

すっかり、お母さんは騙されてこんな奴を褒めている

それからも、アタシは警戒しながら作り笑いをし続けた

「よしどー…そろそろ出ようか」

時田サンのその言葉でアタシ達は外へ出た

お母ちゃんと時田サンは良い感じに寄り添っていた

空氣読んで2人にしておいた方が良いかな・・・？？

そんな事を考えていたとき

「父さんたちは、今日2人で過ごしなよ」

「でも、お前たちを置いてはいけないよ」

「大丈夫ですって、後は2人の時間を大切にして下さいよ  
ね?歩チヤン」

「アイツは、アタシの顔を見てくる  
ここで無理なんて言える訳ないじやん……」

「……ッそ、そつだよ2人です」「しなよッ……」

お母さんと時田さんは顔を見合させて照れくそそつこ

「……そっさせてもいいつかな……」

と声を合わせてこつた……

\* \* \* \* \*

「どうもつもつよシー！」

アタシたちは、お母さんたちと別れて家に帰る事にした

「どうもつもつよシー？」

アイツの冷たい視線を横から感じる

「アンタ、あたしと兄弟になるって事知つてたんでしょ！  
だから、今朝アタシの名前分かったのね！……」

「やうだとしても、何の問題があるんだよ」

「あー腹立つッ！……アンタいつから知つてたのよシー……！」

「…………ッセーな」

「え・・・？？」

視界に急にアイツが入ってきて

え・・・・・?

唇に生暖かいものが入り込んできて・・・

「ンツ・・・ハあツ・・・」

力が抜けていく・・・

「やつと黙つた」

足に力が・・・

「ちよッおいッ？！」

アイツの声がかすれて聞こえてくる・・・

「んッ・・・」

\* \* \* \* \*

「じいは？？」

なぜか、アタシはベッドの上にいた

「やつと田え覚ましたのかよ」

横には、アイツが立っていた・・・

そうだ!!

さつきアタシ、コイツに・・・

犯されるッ・・・・!!

「ちょっとお前何処行くんだよッ??!!」

「嫌ッ!離してやめてッ!!!!」

「待てよッ!まだ足、ろくに力も入んねえだろ?!!」

アタシは、今にも倒れそうなぐらいふらふらになっていた

「あッ・・・・」

危ない転ぶッ!!!!

・・・・・

・・・・あれ？？

皿をゆっくり開けてみると

アイツにお姫様だっこ状態

「だから、言つたろ」

「嫌ッ離して痴漢！変態犯される ッーーー！」

「あ ッうつせーなーー！誰がお前なんか犯すかよ

「せっか、アタシの口に下入れてきたくせに・・・・・」

「それは、お前がギャー、ギャー、謹べからだろ？……。」

「だつたのに……。」

「え……？」

「初めてのキスだつたのに……。」

「は？……。」

「なによー、笑いたか？たら笑えればいいじゃないーーー。」

大きな皿にたくさん涙を浮かべて真っ赤になる歩

「悪かったよ……。」

え・・・・今「マイシ

呆然としている歩に文也は言った

「初めてだったとは  
知らなくて・・・本当悪かつたな！」

マイシの口から、こんな言葉が聞けるとは思わなくて  
歩は、つい笑ってしまった

「おじッ！何で笑ってんだよ！俺真剣に謝ってるんだぞっ！..」

必死になつている文也が可笑しくて可笑しくて歩は声を上げて笑つ  
てしまつた

「おじッ 笑うなつて！」

文也は歩のまっぺをつけりながら怒つたフリをする

「「めん」「めんー  
いたいー離してーッ」

歩がもがくが文也はつねるのをやめない

「痛いー

てか、おひしてよーっ／＼／＼

「んあ？俺を笑った仕返しだ

文也は歩をおひしてお姫様だつたまめぐるぐると回つ  
ぱじめた

「四回つてあたーおひしてよーっ／＼／＼

歩は半べこなりながら、文也に頬む

「良こナビ、お前俺がおひしても歩けねえじやん

そつぱつて文也は、歩をベッドの上にあごいた

「・・・」

歩は、また泣き声うな顔をする

「あ～俺が悪かった…」

「今日も、ここに泊まつてこな

歩は、それを聞いて怯えた

「大丈夫なんもしねえよーー！」

文也が必死にフォローする

「うそ……」

歩は泣き声になるのを抑えて「クンと頷いた

「俺シャワーはこるけど、一緒にに入るか？」

文也は、ニヤッとしながら歩に向かっておどけてみせる

「ばかツ／＼／＼

そんな冗談にも歩はドキドキしてしまっていた

「アタシおかしくなっちゃったのかな？／＼／

歩は、このとき自分の気持ちこなれ、まったく気づいては、いなかつた・・・・・

「おーいー上がったぞー」

文也が歩がいる寝室へ行くと

「寝てゐるし・・・・・

『氣持ちよきつゝ寝てゐる歩の姿

「俺がいるのに無防備な奴だな・・・・

文也は、ため息をもらじ歩に布団をかけてやった

「そんなに可愛かつたら襲つちやけりよへ

歩は静かに寝息をたててゐる

「・・・・・ッて、俺は兄弟に何言つてんだよーーーーー

文也は歩の髪をなでて、くへっくに睡魔に襲われた・・・・・

\* \* \* \* \*

「んっ・・・ふわあつ

て・・・

キヤアアああ！！！

「んっ・・・朝つぱりから、大声だすなよ

「なっ・・・なんでアンタがアタシの隣で寝てるのよッ！－－－

「あー俺昨日そのまま寝ちやつたのか・・・

「アタシが寝ている間変な事しないでじょいねー・?・?

「まつさか、お前みたいなガキに何かしようつい起ひぬかよ・・・  
・」

「・・・ツー！」

「てかー先シャワー入つてこいよ・・・  
タオルと俺が中学ん時着てたジャージ置いておくから

「ありがと・・・

そつまつて歩はバスルームへと向かっていった

アタシおかしくなっちゃったのかな？！

アイツを見ていると凄く苦しくなる・・・・

何よこの変な気持ちはっ／＼

歩は、シャワーを浴びながら必死に自分の頭からアイツの顔を消しそつた

「シャワーありがと・・・・／＼」

「あ、うんてか朝飯できたから一緒に食お？」

「朝ご飯ぐらいアタシが作るのにっ／＼」

「お前作れんのー？」

「なッ／＼失礼ね！家事は得意なんだから」

「じゃー今度俺の好きなハンバーグつくりやがれ

何だコイツ何様のつもりだと腹を立てたものの・・・

「ブッ

ハンバーグとか子供

なんて、可愛く思えりやつアタシで病気なの？！

「ハンバーグ馬鹿にすんなよー！」

とムキになる彼

「はいはい、今度作つてあげるから」

「約束なー

つか、そのうち俺とお前一緒に暮らすんだよな・・・

「来月には引越し手続きするつて」

何か変な感じだつた・・・昨日まで赤の他人だつた人が  
いきなり兄弟になつてしまふんだもん

「俺1・2月2・1生まれなんだけどお前いつ？」

「アタシ1・2月1・6日生まれ・・・」

「うひそーまじかよ俺お前の弟つて事になんじやん・・・」

「ははは

てか・・・・・

今日学校じゃん！――」

「まだ、時間あつから、お前ん家行つて準備してこよ

「うんわかつた！

じやあ！」馳走様でした！――

歩は、そつ言つて文也の家をでていった

\* \* \* \* \*

「よし！準備OK

今日いはせ、遅刻しないぞ――」

歩は、そつ言つて玄関をでた

前編・第一回

門を出たとき後ろから声がした

「え？ 待つててくれたの？！」

そこには、文也の姿があつた

「ちげー よ勘違いすんな／＼／＼ただ、暇だつたからいただけだよ！」

眼鏡をかけている文也は、さっきまでの文也と別人かと思うぐらいガラッと変わる

「昨日ずっと眼鏡かけてなかつたよね・・・?」

あれつと思ひ歩はツ文也に問いかける

「別にビーでもいいだろ・・・」

「あれ、その眼鏡・・・」

歩は文也の眼鏡を取つた

「やつは伊達じやん田悪くないのになんで眼鏡かけてんの？」

「お前には、関係ない」

文也は怒った表情で歩から眼鏡を取り返した

歩はずつと疑問だつた着ている服や物はお洒落なのに  
学校に行くときは、前髪を垂らしふつとい黒縁眼鏡をかけ  
歩には、わざと自分をキモく見せよつとしていひみつにしか、見え  
なかつたのだ

「普通にしてたら、絶対モテるのに・・・」

## 第2話

「つせーんだよーー」

歩は、びっくりして鞄を落してしまった

「『じいじめんなさい』……アタシそんなつもつじや……」

「…………めん大きな声出して……」

俺先に学校行つてゐるわ……」

そういうて文也は歩を置いて行ってしまった

「あたしの馬鹿……」

誰にだつて、触れられたくない事の一つや二つあることをつてゐるじゃない

それなのにアタシ……

「あー歩じゃん」

後ろから、聞き覚えのある声がした  
歩が振り返ると

「美奈つーーー」

「歩も1人??.なら、一緒に行こ」

相変わらずテンションが高い美奈

「うそ、こーよー。」

「歩つておしゃれだよなーーー。」

「そんな事なによ」

「私服の学校つてその人のセンスがすぐ分かるじゃない?」

「あーまあ、モーダよね」

「おしゃれといえば一時田だよな」

「…………。」

歩は、何も言つ事ができなかつた

「やういえば、昨日歩時田と一緒に来てたよね  
もしかして、付き合つてるとか?!!」

「そんな訳ないじゃない!!!!

昨日は、たまたま会つただけよ」

歩は、必死で弁解した

「やうだよねー

あの女嫌いの時田が彼女作るわけないよなーーー。」

「美奈もしかして、時田と同じ中学校だったりするへ。」

「あーうん、同じ中学校だつたよ？」

あいつ昔は、明るくておしゃれでかっこいいって超モテてたんだよ！以外でしょー」

「うへ、うさ……」

歩は、思ひもつたりが開けなくなつていた

「だけどね、時田を狙つた女の子達の間で喧嘩が起つちやつたの  
れあ

それで、何人も怪我人が出で先生や校長先生にまで時田は責められ  
たぽいよー？」

「何ソレ時田なんも悪く無いじゃん！……」

「えうなんだけどさ……あいつ責任感じてあんなどっさい伊達  
眼鏡までしちゃつて

モテすぎもつてゆーのも大変なんだよね

歩はもう出てくる言葉が無かつた

アタシアイツの事傷つけた……

「ちよつ歩？！」

何で泣いてるの？？大丈夫？！？」

「うん・・・」めん美奈・・・・・

「気にはんなつてうち等トモダチじやん！……」

美奈のその一言が余計歩の目に涙をためさせ事になった

「つわあ～ん美奈ああ」

\* \* \* \* \*

「歩、落ち着いた？？」

「うんありがと美奈！」

「いえいえ、」

「てか、あたしのせいで美奈まで遅れちゃつよ～！～～～」

「大丈夫だつて！」

「ほら、急げッ！～！」

歩と美奈は、急いで教室へと向かつた

ガラツ……

「歩セーフだよ……」

美奈は、ニコッと歩に向かってピースした

「よかつた」

「ありがと美奈！」

「あー歩と美奈やつと来たーーー！」

クラスの女子たちが次々と歩たちへの元へと向かって来た

「へへへ」めん

「・・・・・・・・」

そんな歩の姿を見ている男子生徒が一人・・・・・

「文也ー  
何見てんの??」

そう言って文也の前に現れたのは、幼馴染の信吾だった

「ベツベツに・・・／＼／＼

文也は、慌てて歩から視線を外した

「はっは～ん

俺分かつちやつた！

文也あの女子の中に気になる子こるんだ～！～

信吾は「ヤニヤとしながら、文也を見た

「ばッ／＼／＼

そんなんじやねえよ！～！～！～！

「お～ムキになるところがますます盛じ～～どのも～？」

信吾は、女子生徒一人一人を見ていく

「美奈は、文也のタイプでは無いしょ～あ～もしかして、

昨日一緒に登校してきた・・・・なんだっけ・・・・

信吾は、腕を組んで考えてるポーズをする

「あー佐古田歩だっけ？？

その子でしょ！～！」

信吾は昔から変わらないあの笑顔を俺に向かえた

「んな訳ねーだろ」

文也は、そんな信吾の頭をくしゃくしゃと撫でた

「うわあっ！」

よめひよお文也あ

あーあ違つか……でも、あの程度の可憐されて一番男ナニウ  
ケるんだよねー」

「え・・・・・? ?」

「可憐すがりでもなく普通すぎでもなくて、結構先輩方狙われてるぽ  
いよー」

「・・・・・・・・・・」

文也は、声もでなかつた  
なぜかは、自分自身よくわからなかつたけどとにかく胸が苦しくな  
つていた

「文也ひまー..」

「え・・・ビラした?」

「ビラしたつて文也ほーつとじてるんだもんー。」

「あ、悪い悪い、」

\* \* \* \* \*

「歩て好きな人いるー？？」

「え・・・？！？」

「いるんだー  
だれだれー？！」

夏帆は目をキラキラさせながらアタシに近づいてくる

「いないよ～夏帆は、いるの？？」

「ん～あたしも、いないだつてこのクラスあんまかっこいい人いなくない？？」

「そつそつだね・・・」

アタシは、このときなぜかアイツの顔を思い出しちゃった

「このクラスのイケメンといえば・・・  
あそこにいる2人じゃない？？」

**【イケメン】** とゆう言葉に反応して次々と女子が集まつてくる

「時田 文也と山崎 信吾よねえ」

「えー時田つて人服はおしゃれだけど  
髪長くて怖いし、眼鏡ダサくない?」?

女子が集まつてきてあーだこーだいつてる中アタシは  
また、あの時と同じ胸の痛みに気づいた・・・・・

「え、アンタしらないの？？」

「吾輩は本筋で、ぬちやぬちやかりにここのかへ。」

「えー嘘信じらんないーーー！」

「あれは、わざとモテない為のカモフラージュなんだつて！…結構時田の事狙つてる女子多いんだから！」

九月  
•

苦しいよ

アイツの名前他の女子に言われただけでなんでこんな苦しいの？？

＊＊＊＊＊＊＊＊

「つひー

文也の近くにいた男子が歩たちの方を見て鼻を伸ばしている

「おい、見てみるよ！

佐古田のパンツ見えんぞー！」

「うわーモテない男子はこれだから嫌だよー」

信吾が苦笑いで文也の方を見てくる

「・・・・・」

「おい？文也どこ行くんだよ？ー」

文也は、歩たちの方に近づいていく

\* \* \* \* \*

「あや～ツー！」

夏帆の叫び声が聞こえてくる

「時田文也が」ひび来る／＼＼＼＼＼

歩が顔を上げると

え・・・・　？？

アイツと皿が合つ

「歩・・・・」

名前を呼ばれただけで顔が赤くなるのが分かる・・・・

「女子のみなさん  
ちょっとマイツ借りるね？？」

呆然としているアタシの腕を掴みアタシが連れてこられたのは  
人気の無い教室

「なッなによ・・・・／＼

「お前無防備すき」

「は？

なんでアンタにそんな事言わなくちゃならないの？？

歩は、素直な気持ちが言えなかつた  
「めんなさいつて

謝ろうと決めていたのにも関わらず  
文也の顔を見ると反対の事ばかりが口にでてしまつ

第3話

「ツ嫌なんだよ・・・・・・」

「へツ？」

「お前が他の男に下心のある田で見られんのが嫌なんだよ！－！－！－！」

それって・・・・・

「アンタあたしの事嫌いなんじや・・・」

嫌いだつたら、こんな事言うかよ！！／＼／＼

文也は、人生で始めて苦悶した・・・・・

つもりだつたが・・・・

「兄弟愛つてやつぱいねーーー。」

歩が文也をキラキラした目で見る

「はッ？！！」

「いやーアタシ兄弟いなかつたから、  
こつゆう兄弟愛羨ましかつたんだよねーーー。  
これからよろしくね

弟としてーー。」

「はははは・・・」

文也は、人生で始めて失恋をした  
この天然な姉に・・・・

「あー！」

アタシ美奈と約束あるから、またね~」

そう言って歩は、教材室に文也一人を置いて行つてしまつた

「なんだ」「なるんだよ  
氣づけよなあの馬鹿・・・・・・・・」

文也は、一Jの先の事を考へると愕然となるしかなかつた

\* \* \* \* \*

その頃歩はとゆうと・・・・・

なんのよアイツ／＼

つい、さり気は茶化しちやつたけど……

「もー意味分かんない ッ……」

「どーしたの？？」

歩がびっくりして、後ろを振り向くと  
そこには、信吾の姿が

「あ・・・えと・・・／＼／＼／＼」

今 の 独り言を聞かれたと分かつて歩は、顔を赤らめた

「可愛いー

顔真っ赤だよお？

大丈夫？歩チャン

「え・・・なんでアタシの名前・・・・

「あーやっぱ僕の事覚えててもらえなかつたか・・・・  
僕は、歩チャンと同じクラスの山崎信吾だよ  
これから、みるしくね

「

山崎信吾・・・・

どこかで聞いた事ある名前だなとふと考へこむ歩

【「このクラスのイケメンといえれば……」

時田文也と山崎信吾よねーー】

あの時夏帆が言っていた言葉を思い出す

確かに、綺麗な顔立ちをしていた、どちらかといふとてゆか、めっちゃ女の子みたいな顔立ちだった……。

「僕、歩チャンと一回お話ししてみたかったんだあ

「え・・・アタシなんかと…？」

「初めて見たときから、この子可愛い子なあと思つてたんだよ

「またまたー

そおやつて女の子達何人も口説いてきたんじょー

そつ言つて歩は、信吾のおでこに軽くドパンをした

「違うのこり・・・・

僕本当に歩チャン可愛いなって思つて

お友達になりたくてつ・・・・

信吾の大きく澄んだ瞳に大量の涙が浮かんだ

「えつ 信吾君?..!

ちよつごめんアタシが悪かつたからーー信吾君の事信じるから  
ねつ?泣きやんで??」

歩は、必死に信吾を泣き止ませようとした

「本当に…？」

僕の事信じてくれるの……？」「

信吾は、歩の顔を覗き込むよひと見る

「ひひひん…」

「やつたー

じゃあ、歩って呼んでもイイ？？

信吾の豹変ぶりに驚かされながらも歩は、信吾に笑顔を向ける

「あッ！

僕の事は、信吾でよんでは？」

信吾は、相変わらずの上目遣い  
歩は、身長が高いほうではないが信也と並ぶと、すこし差があった。  
・・・

「信吾ひて

もの凄く可愛いね・・・・・

つい口から、こんな言葉が出てしまひまじ信吾は 美少女 だった

その時

さあ、ひつ・・・

「え・・・・・?」

信吾の顔が歩の胸元に蹲つた

「歩ひどいよ・・・  
僕この顔のせいで散々馬鹿にされて、いじめられてきたのに・・・  
」

「そうだったの?!  
ごめんね信吾・・・  
アタシ気づかなくて  
本当ごめん・・・」

歩は、信吾の体をきつく抱きしめた

その時歩には、男を抱いているとゆう感覚がなかつた、男とゆうより綺麗なお人形を抱っこしているとゆう感覚の方が遥かに上回つていた

\* \* \* \* \*

その頃文也とさつと

「本当覚えてるよあの天然馬鹿女  
俺がいないと生きていけないよつづけさせいやる……」

文也が、そんな事を呟きながら歩いていくと・・・

「・・・・・・・

何やつてんだよ奴彼等」

文也の数メートル先に、抱き合っている赤と黒の姿・・・

文也の存在に先に気づいたのは、歩だった

「あつ・・・

「これは、やうやう訳じやなくてつ――」

必死に弁解しようとする歩に対し  
怒りを抑えきれない様子の文也

「あつ・・・

「文也じやへん

やつと文也に近づいた信吾は、怒氣も読まないで文也に近づく

「ひさんの馬鹿つ――!――!

文也はつこに大声をあげた

「びーせ、お前信吾に可愛いとかなんとか言われて  
その気になつたんだろこの勘違い馬鹿女――!――!

「なによ――

信吾は、アタシの友達なんだから――!――!

「はッ

てか、お前男の信吾よつも女のトトロじへねえんじやねえの?――!――

歩と文也の凄まじい喧嘩に信吾は、ポカンと口をあけた」としがで  
きなかつた

「そんな事言つたら、信吾可憐そつじやない——」  
「の顔立ちのせいで信吾は侮められてたんだから——」

「はア？！」

何言つてんの？——

信吾は、俺どもと同じクラスだけど虚められた事なんて一度もね  
えよ——

「え・・・・? だつてせつあ信吾・・・・・・

歩と文也は、信吾の方を見る

「え・・・・と

アハハハハ

ばれちやつたへ

「——」

「の後文也と歩からきつてお仕置きがあつたのは、書つまでもな  
い・・・・・・



あれから、2週間学校にもなれて友達もいっぱい増えた

「歩一自分の荷物ちやんとまとめたのー?」

「うん、もう少し！」

アタシたちは、お母さんの再婚相手時田サンのお家に引っ越す事になつた

「もう引越しセンターの人があれやうんだから早くしなさい……」

「はいはい」

歩は、低血圧のせいで朝が弱く朝早く起こされて機嫌が悪かつた

ピンポン

インター ホンが鳴る

「あら、引越しセンターの人かしりーーー歩お母さんらしいからでこようだいーーー」

「ほーい・・・

歩は、だるそうアドアを開く

そこには、

引越しセンターの人なんかではなく  
ダルそうに歩を見下ろす文也の姿

「なッ！――

なんでアンタがこりのよつ――――！」

「しゃーねーだろ――

俺だつて來たくなかったけど父さんに頼まれたんだよ――――」

相変わらずアタシたちは、顔を合わせれば喧嘩ばかり  
本当にこの先やつていけるのかと歩はいつも不安だった

「あら、文也君――

手伝いに来てくれたの？？偉いわねえ

お母さんは、まだ「イツの本性を知らない

「いえいえ、父に頼まれたものですから……  
何かお手伝いする事はありませんか？？」

「そうねえ……お手伝いといつても全部終わっちゃったし……  
あーもうだー歩の荷物まとめるの手伝ってあげてくれないかな？」

「え？…ちよつとお母さん向こうへ……」

「いいですよ」

「こじやかにアイツが微笑む

なに〇〇してやつてんのよ……

と内心むりとしながらも歩は、自分の部屋へ向かった

「早くまとめねえと引越しセンターの人来るぞ……」

「分かってるわよ！――

アンタこアタシの部屋になにしに来たのよ――。」

「文也……」

一  
え  
・  
・  
・  
?  
?

「だから、俺の名前はアンタじゃなくて文也！……」  
これから、文也って呼べ……」

何よその命令形わッ――――――――――

「分かつたわよ！」

歩は、少しためらこながら、アイツの脇前をよんでもみる

文也  
・  
・  
・  
・

「ん・・・  
これが？？」

その時一枚の写真がひらひらと落ちてきた

「なんか、落ちてきたぞ・・・・・

・・・・！？」

その写真を見て文也は驚いた

「写真の中には、なんと幼い頃の自分がいた隣には、昔仲の良かつた文也の初恋の相手がピースをしていた

その子の名前は、確か・・・・・・

あ ゆ む

文也は、まさかと思い写真の少女と田の前にいる義理の姉を見比べた

髪型は変わっていたが昔と変わらないあの大きな瞳と微笑む」というつすらと浮かぶえくぼ・・・・

「あー懐かしいそれ、あたしが幼稚園の時の写真！――

・・・・て、何固まつてんのよ・・・・?」

「・・・・」の隣にいる男の子、俺・・・・

「ええええええええ？！――

ふつちやんて・・・・

文也の事だったの？――」

懐かしこれのあだ名俺は、昔からマイシンでふりやされたとおり変な  
だ名をつけられていた

「うさんおつあへなくなつて……」

「おばれんみてえな事ゆつなんよ……」

文也は、そんな歩の頭をくしゃくしゃと撫でた

「ふりけやんあんな弱虫だったのに……」

歩は、文也に向かって思いつきつ下を出した

「過去は、ふりかえらねえのが男だ……！」

そんな事いから早く荷物まとめよ」

そんなかつこつけた事言つても

文也の顔が真っ赤だったのは、歩は言わないのであげた

「歩へ文也君準備はできた？？」

下からお母さんの声が聞こえてきた

「あーまだ途中だった……」

「しゃーねなー歩ガムテープよーせー。」

そうこうして部屋の荷物をまとめだす文也

歩・・・

自分の名前を文也に呼ばれて、歩はなんだか恥ずかしい気持ちになつていた・・・

\* \* \* \* \*

「ふうやつと終わつたあ・・・・・・

ありがとな文也ーー」

やつぱりまだ、名前を呼ぶのは恥ずかしくて歩の声は震えていた

「はは、何声震えちやつてんの  
まさか、俺の事意識しちやつてんの系?・?」

文也は奇妙な笑顔を歩に向ける

「え・・・・・・」

歩の顔は、真っ赤で今にも泣きそうな顔をしていた

「・・・・・」

沈黙が続く・・・

ヤバイ・・・・

アタシの気持ち文也に詠びかれた・・・・?

歩の中には、凄い焦つてる自分と、  
もう一つその事バレてるんなら告白しちゃおーか  
なんて思つてこる自分がいた

「歩・・・・・」

「歩む、  
俺の事どう思つてるので・・・・?」

歩は、文也に急に前方を呼ばれでビックリする

文也が覗き込むよひ歩の顔を見る

「どう・・・  
どうして別に芝――――」

歩は、無理やり文也を突き放し田を逸らした

その時・・・

わわわ・・・・・

文也は、壊れ物でも扱うように歩を優しく抱きしめた

「だッ

駄目よッ／＼／

あッあたし達は、兄弟なんだからッ・・・／＼

「良いよそんなイイ子ぶんなくて  
本当は、嫌じやないんだろ・・・?/?」

文也は、歩の全てを見透かしたとでもゆづらひもつとも、歩を抱きしめた

「俺が欲しいって顔してる…………」

「してないッ……」

文也は、何かを企む子供のような田で歩を見つめた

「んッ……」

「ふみやッ……」

文也はあの時と正反対の優しいキス歩にプレゼンとした

本当に触れていいのかすら疑うような柔らかい顔

あまり、男慣れしていない歩のカラダは異常なほど文也に對して敏感になっていた

「シ~~~~~」

「歩……」

めりひやせひつめ

「やつ……」

そろそろ、お母さんめいひよ……」

「心配性すぎ、  
じゃあ、もうやめてあげる?」

歩からキスしてくれたら……

「えー?」

アツアタシから、キス??!!

歩は、パニック状態になっていた

「嘘だつて」

文也が歩に向かって一口ひとと微笑む

「俺達これから、一緒に住む訳だし  
俺が居ないと生きていけなよ」と微笑む

「へ? ! / / /」

歩は忘れていたが、これから、文也とずっと一緒に暮らすのだ

それだけでもう歩は、何がなんだか分からなくなっていた

## 第5話

シバヤマヤマハラ・・・

「んッ・・・・・」

カーテンから、春の日差しが差し込んでいる

普段低血圧のせいで遅起きの歩だつたが  
この日は、なぜか目覚めが良かつた

「んッ?」

やけに、布団が生暖かいことに歩は気づいた布団をめぐると

そこには

義理の弟文也の姿・・・・・

歩は、パニックになりながらも昨日あつた事を振り返つてみる

昨日は、時田家に引っ越してきて・・・・  
引越しの荷物を自分の部屋に置いて  
もう1・2時をまわつていたので歩はベッドに入り込んだ瞬間  
文也が部屋に入つてきて・・・・

そこから記憶が無い・・・・

アタシは、焦つて文也を呴き起します

「んー・・・  
なんだよ・・・」

「なんだよじやないでしょー?...!

何でアタシのベッドに文也が居るのよ?...」

まあ世間一般でやつ夜這いつてやつへ.  
「そりゃあ・・・

アタシが一番弱い彼のあの笑顔がアタシに向けられる

「よつ夜這いつて！」

お母さんたちに見つかつたらどうすんのよつ……！」

「あー父さんたちならとづくに仕事行つたし……。  
今日は、学校休みだし、俺と歩の2人つきりつて事だね」

「ふつ二人つきり！？？」

「そーんなに俺と2人きり嫌かよ」

文也は、子供のよつこまつペを膨らます

可愛い・・・

それは、もう抱きしめてあげたくなる程だった

「文也ー」めーん  
機嫌直してー？？」

「じゃあ、俺のよつ」と聞いてくる。?.?.

また、この子は可愛らしい事を・・・  
なんて思いながらも歩は頷く

「じゃあ、これから歩は俺の彼女ね

「え・・・？」

それは、思つてもみない言葉だった

「表上は、兄弟つて事にしてあげるけど  
裏では、歩は俺のモノだからな」

真剣な文也の表情に不覚にも歩は、凄いときめいていた

顔を赤らめながらも縦に2回コクンと頷く歩

「やった！」

急に文也に抱きつかれた歩は、驚いてベッドに倒れこんだ

え・・・

今この状況かなりヤバイよね・・・

文也が歩を押し倒していく光景

その恥ずかしさで歩は、耐え切れず思わず目を瞑る

「す」「い、警戒してるね・・・・

俺たち恋人同士なんだよ？？そんな警戒しちゃ駄目だしそう」

文也は、ぷッと笑いながら歩の上から降りた

「 ッ――」

歩は、何も言えずに顔を真っ赤にしている

「やうだ！

歩が、今日出かけない？？

思にもよらないお誘い

いわゆる世間一般でいう【テーク】いやつですか？

「勿論、ひ・・・・」

そこまで言いかけたとき

（ ）

アタシの携帯がなる・・・  
この着信音は

「美奈だ・・・」

画面を開いて通話ボタンを押すと

『おは～！』

歩起きてた？？！』

朝だとゆつのにも関わらず美奈は、凄いテンションが高い

「ん・・・

起きてたよ・・・

歩は、チラツと文也の方を見ると口パクで

だれ？

と聞いているのが分かる

みな

アタシは口ぱくで文也にこう答える

『歩く

今日暇??.』

歩は、困った友人を取るべきか恋人兼弟を取るべきか・・・

「美奈え・・・とねん」と

『まじで?!!

やつた歩ありがと超大好き!・じゃあ、10時に駅ね!-!  
んじやばーい』

まだ、何も言つてないのに・・・・

恐るべき美奈のポジティブな

「文也~」めん・・・・』

歩は、申し訳なさそうに文也を覗き見る

「だいたい分かるよ・・・・

美奈のヤロ~!..

せつかくの初デートを!-!-!

「い）あなたセー・・・」

「別に良こよ

朝は、美奈に歩を貸してやる……。

でも夜は、歩は俺だのモノだがりな~」

また、あの奇妙な微笑みを浮かべる文也

「ひへへ」

「じじや、俺も信吾と遊び行」  
「じゃあまた夜な、歩・・・・・」

やう言つて文也は

歩の部屋をあとにした

支度するかつ――――  
「よこ――

歩は、大急ぎでマイク道具を引っ張ってきた

\* \* \* \* \*

「美奈」

「ごめん待つた?！」

歩は、息をきらして美奈のもとへと向かいつ

「大丈夫〜！  
じゃあ行こつか」

「で、美奈今日はどうしたの？」

「え〜と・・・  
歩彼氏いる??」

え・・・・?

まさか、文也と付き合つてゐる事バレた

・・・・・?

「いなide・・・・・」

「つむに歩は、嘘をついた

「なら良かつた～！！

今日うち等、女2人てのも寂しいでしょ？  
隣の男子校の生徒も呼んでおいたの」

え・・・・・・

歩の額から冷汗が滲みでていた・・・

「アツアタシ！」

美奈に帰ると告げよつとした時・・・

「うわ～

美奈のトモダチめつちや 可愛いじやんー！ー！ー！

歩の目の前に2人の男が現れた

1人は、茶髪で長身の世間一般でゆう  
【イケメン】とゆう言葉がピッタリの男

2人目が・・・

今時風に無造作に立てられた  
赤茶色い髪が印象の眼鏡の男

2人の、モテそうだなとは、思うが歩のタイプではなかつた

やつぱ、文也が一番かつこいい・・・  
歩は、心中一人で惱氣を言つていた

「ほら、一人ずつ歩に自己紹介してっ――」

美奈が取り仕切る中1人目のイケメン君が挨拶を始めた

「タクヤで、す  
よろしく歩チャン」

「はあ・・・」

歩は一つ発見した事があった、こうゆうキャラい人つて、  
【タクヤ】だとか  
【タクミ】だとかって言つ名前が多いんだよね・・・

一人で笑いそうになるのを必死で堪えた

「俺は、涉！」

歩つてよんでもいい〜？？」

「はあ・・・・」

歩は、相変わらずの適当な返事をしておいた

「ずるいぞ涉！-！」

なんて、タクヤとゆう男の批判を浴びながら  
渉とゆう男はニッと笑った

2人目の眼鏡男子君は文也とは、違つて

いわゆる伊達眼鏡

なんで、目悪くねえのに眼鏡掛ける必要があんだよーーー！

とまたもや、歩は心の中で一人つつこんでしまつた

「はあ・・・・」

「え・・・・と歩です  
よろしく・・・・」

歩は適当に自己紹介をして美奈にテレパシーを送つてみた

美奈もうアタシ帰りたい・・・

「なこ、歩アタシ見てんのよ  
この中で気になる男でもいた??」

小声で美奈は歩にそりやつ

やつぱ駄目か・・・・

歩は、苦笑いしながら美奈の方をみた

「よし-

「じゃあ行こつか！」

タクヤが取り仕切る

「美奈といひで今日は何処行くの??」

「ん~服とか靴とか欲しい物いーぱいあるから  
それ買って帰りご飯たべよ~??  
やっぱ、荷物運びに男は必需品でしょ!!

しかも、みんなアタシの元同中で一番モテてた3人だから  
隣にいるだけで目立つでしょう？

「はあ・・・」

歩は、もはや疲れきっていた

「歩の、好きなタイプは～？？」

隣でさつきからじつに男タクヤ・・・

「真面目っぽそうで、眼鏡とかかけてる人・・・」

アタシは、タクヤと正反対のタイプを言つてみた

「それ、俺じゃん？」

後ろから、ひょいと歩がでてくる

「俺、眼鏡男子だし～！～！」

「歩お前その眼鏡俺にさせや～！～！」

タクヤが歩の眼鏡を取ろうとする

「やめろーー馬鹿つ  
アハハハハハ！！」

なんだかこの人たち、悪い人では無いんだなーと歩は思った

「あーこの服可愛い！！！  
歩見てみて～～！」

美奈のもとへと行くと美奈はレトロな模様の可愛いワンピースを手にしていた

「本当だ～  
美奈きっと似合つよーーー！」

「アタシちょっと試着してくるね～」

そう言って美奈は試着室へと走っていった

\* \* \* \* \*

「文也今日機嫌悪くね？？」

それもその筈今日は歩とテーーのはずだったのに  
美奈のせいで行けなくなつたのが文也は気に食わなかつた

「その表情は女絡みだな～？？」

そうだ、今から女の子でも呼ぶ？？」

「今はそーゆー氣分じゃねーし・・・

てか、俺の親父再婚したって信吾に言つたよな？」

「あー中学とき聞いたあ！」

もう正式に再婚したんだあ！」

「それだ、再婚相手に俺と同い年の娘いるつても言つたよな？？」

「やうそう、

文也その子の事

わざわざ隣の中学校まで行つて

毎週見にいつてたよな」

「そこまで俺信吾に言つてたっけ・・・

「忘れちゃったのー？？」

それで、その子に雪道で転んだ所見られただつて  
文也超落ち込んでたじゃん！！」

その時文也は俺つて信吾になんでも話してたんだなと実感した

「あの子の事文也好きなんでしょう?..?」

俺は、飲んでいたコーラを思わず噴出した

「うわあー

文也汚いー

「俺そんな事までお前に言つてたのか?..!」

「文也みてれば分かるよー  
で、その子どんな子なー??  
信吾にならもう全部話しても良いか・・・  
信吾の顔を見る

「俺のクラスにあゆ・・・・

文也は、そう決意して信吾に歩き合つてこうとも叫びました  
「じゅしたの文也?..」

信吾が文也の視線の先を追つていくと

「あ、アイツ昔同じクラスだった涉とタクヤじやんーー！隣にいるのが、

え・・・歩じやん・・・

なんであこつ等・・・

「・・・・・・・

文也が無言で立ち上がり歩たちのもとへと向かつ

\* \* \* \* \*

「それで、コイツ馬鹿なんだって  
アハハハハハ！」

歩は、すっかり涉とタクヤにも慣れて涉の昔話なんかをしていた

「あー  
タクヤあれ、文也じやね？？」

「本當だーー！」

「おーこ文也ーーー！」

え・・・・・?

歩はタクヤたちが手を振つているまつを見る

「嘘でしょ・・・・?？」

30メートル程先には、凄い怒った顔の文也

「文也久しぶり  
元気してたー??」

涉が文也の肩に手を回す

「歩

お前にんな所で向してんの?」

歩は、下を俯く文也の痛い視線だけを上から感じるのは、

「え・・・?

歩と文也知り合い?」

全く場の空氣をよめないタクヤと涉は  
ポカソと口を空けるしかできなかつた

「文也ー！ー！」

後ろから、信吾の声がする

歩は、もうどうしていいか分からずには  
ただただ、ずっと下を向いていた

「もういい

お前の気持ちは、分かった・・・  
もうお前と俺は、何の関係もねえから安心して  
こいつ等と遊べよ」

文也の冷たい目

「やあ・・・ふみやつ・・・やだよつ・・・

歩は、子供のよう泣き出す

「もう俺の名前呼ぶな」

文也は、そう言い残すと歩の前から、消え去った

「ひ・・・・・やあ・・・ふみやあ・・・・・」

「歩大丈夫か？？」

涉が優しく歩の涙を拭つてあげる

「ありがと、涉つ・・・」

「歩ーー。」

少し先には、わざわざの店の紙袋を持つた美奈が手を振っていた

「なんで歩泣いてる？！－！－！  
ちょっと！タクヤあんたでしょ－！－！」

「ちつ違つの美奈ツ！

あ・・・アタシ気分悪いからもっ帰るね？」

「え・・・？」

「俺歩送つていくからタクヤと美奈は、2人でまだ買い物してなよ

「・・・・歩大丈夫？」

心配そうに美奈は歩を覗き込む

「うん大丈夫！

『めんね心配かけて』

「よし－

じゃあ美奈俺と買い物しよーぜ－！－！」

「ちよつ－

タクヤ？！－！」

そういうつてタクヤは、美奈も手を引き歩たちから、離れていった

「！」めん渉・・・

渉も美奈たちと買い物してたほうが・・・」

結局歩は、渉に家まで送つてもひつ事になつた

「いや、俺も丁度帰りたいと思つてたし  
歩一人で帰らすなんて俺には出来ないよ・・・」

「ありがとう渉・・・」

「・・・歩？

答えたくなかったら良いんだけど、  
文也とせ、じーゆづ関係なの？？」

「・・・・・・・・・・・・」

歩はまた、涙が出てそののを堪えた

「あ・・・」めん変な事聞いて・・・

גַּעֲנִים

「アーティストの心」

「歩の嫁いだり変なの？？」

「あ・・・うん

この時歩は、ある事に気がついた。・・・

今日は、お母さんもお義父さんも仕事だ・・・  
もし、帰つて文也がいたら凄い気まずい事になる・・・

「涉う・・・」

歩は、また涙を流しながら渉の服の端を引っ張る

「まだ、家に帰りたくない・・・」

「え・・・・・・? ?」

「今、家に帰つたら文也に怒られるつ・・・」

「そつか、

じやあここの近くに俺がよく行く店あるんだけど行かない??」

「いいの・・・?」

「勿論!

ほら、涙ふいてつ

涉の微笑みの中には  
裏の涉がいること

そんな事歩は分かるはずなかつた・・・

\* \* \* \* \*

一文也

そんな怒んないでよお

信吾は、呆れ顔で文也の肩を叩く

つせーな！！！

俺は、別に怒ってなんかいね!!

「もういい加減帰ろう？？」

文部省のせんと教科書に詰つてた方がいいって……」「

• • • • • • •

しうがなく、文也は帰ることにした

「もう9時か……」

父さんたちは、食事していくつて言つていたから  
家には、アイツ一人か・・・・

「あーれ？？」

文也の家電気ついてないよ？？  
歩まだ、帰つてきていんじやない？」

え・・・・？？

「・・・・・・・・

文也・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

信吾の真剣そうな顔

文也は、急いでケータイを取り出した

「・・・・・・俺、歩のアドレスも番号もしらない・・・・・・

「ええええ？！？  
どうすんのわあ！  
歩あいつ等に襲われてたら・・・・・・

急いで文也は、アドレス帳の中から、タクヤのアドレスを探す

タクヤ・・・

タクヤ・・・・・

いたつ！――

急いで文也は発信ボタンを押す

ツーツーツ

『もしもし・・・・』

「タクヤ？――お前歩と一緒か？！――」

歩なら、とっくに涉と一緒に帰ったよ

『え・・・・？？

『もしかして、まだ帰つて来てない・・・・？』

「え・・・・？」

「ああ・・・・」

『そりや、大変だ！――

文也早く探さないと・・・・・』

「心当たつは、あるか？！――」

『それなら、一つ思い当たるヒントがある――――』

\* \* \* \* \*

「渉・・・・?」

震えながら歩が尋ねる

「なーに ア ュ ム ?」

「なつなんで」Jのドアの鍵開かないの・・・・?」

数十分前渉につれてこられたオシャレな喫茶店  
2人きりではなないと渉は、VIP ROOMと書かれた部屋  
に歩をつれこんだのだった

「そーれはね

それ、外からしか空かないようになつてるんだ」「

さすがに鈍感な歩でも、自分の身の危険を感じた

「渉っ!..

アタシもう帰る…

ここから、出してッ…

歩がドアをドンドン叩く

「ドア叩いて助け呼んでも無駄だよ…・・・??  
外には、見張りがついているからね」

鳥肌がたつような渉の微笑み

わつきの優しかった渉とは、まったく別人だった

「歩も、ここまでノコノコと付いてくるつて事は、一〇一〇事期待  
してんだろう・・・??」

渉の手が歩の首筋に忍び寄る

「やつ・・・・・

文也つ…助けてッ…

「だーから、助け呼んだって無駄だつて

もう文也とは、一 ゆー事したの？？

一枚一枚ゆつくりと捲っていく渉

「触らないで！！

初めては、文也とつて決めてるんだから！……！」

「え・・・何歩処女なのー？？以外ー」

歩は、顔を真っ赤にした、

目には、大粒の涙が溜まっている・・・・

「泣かないでー？？

優しくしてアゲルカラ

すぐ、この快感の虜になるよー」

渉の奇妙な笑い声が部屋に響く

「文也あ ツ！！！」

「…………」

「…………」

「涉一お前がひくわんじょん…………」

田の前で、息を切りました文也の姿

「文也……」

「涉一……」

「歯あ食こしまれつ…………」

やうこつて涉の腹部に文也が怒りをこめて一撃を食いつかす

渉の口から、赤い液体が飛び出した

「文也つ！！！」

歩は、涙をいっぱいにしながら叫ぶ

卷之三

俺が来なかつたらお前コイツにヤられてたんだぞ？？！

「おひな月」

歩は、ショボンと文也を見る

「だから、ほっとけねえんだよ・・・・・ / / /」

「え・・・? ?」

「今日から、お前を一から教育してやるッ……。」

「え／＼」

「まず、夜は激しくなるから体力つけとかねーとなー。」

「くっ？…／＼／＼／＼

「ほり、家に帰るぞ…・・・・・・

「うそつ…・・・

もう眞面目は文也の手を取ると

この手だけは、一生離さない  
と心に決めたのだった

あれから、6年・・・

「歩早くじろよつ！—！」

「待つてよ文也！—！」

「行くぞッ」

2人で開けたドアの先には・・・

「おめでとつ歩と時田！—！」

そこには、もうすっかり大人になり、  
一児の母となつた美奈の姿・・・

そしてその隣には、相変わらず何年たつても変わらずテンションの

## 高ニタクヤの姿

そう美奈とタクヤは、一年前結婚したのだ・・・

そして、アタシたち母さんといい・・・・・

「花嫁姿とつても綺麗よ歩・・・・・」

涙ぐむお母さんと

隣でお母さんの肩をを支えてくるお義父さんの姿

あれから、私達はお義父さんとお母さんに金子を話した・・・

あると

『文也と歩が凄く悩んだ末決めた決断なり』

とお義父さんお母さんは、アタシたちの為に籍をいれないでおいてくれた

小さな小さな森の教会でアタシたちは夫婦となつた

ふりかえると、6年間色々な事があつた

些細な事で喧嘩したり

学校でアタシたちが兄弟とバレて問題になつたり

文也の浮気疑惑まででた

でも、最後には必ずどちらかが、半泣きになりながらも謝つて  
次の日には、仲直りしていた

これから、なにがあるか分からぬ

でも、2人なら何でもできる気がした

その翌日、可憐な姿の少女ができた

そのまま、文也と歩が始めてあった雪道から

ゴキと叫びられた

「ゴキー

もっさり、帰るわよ——..」

「ママ つ

「ゴキ悪ぶなー

後ろに、すっかり親馬鹿になってしまった文也の姿

「う~

パパさむか・・・

ゴキふみひこつ

「

「パパは、冬大好きだよ？」

あの頃と変わらない笑顔で優しく微笑む文也

「おんも、ちめことむいなのこ？？」

「ママと会ったのもこんな冬だし  
ユキが生まれたのも冬だからね  
パパにとつて冬の思い出は一番キラキラ輝いているんだ

「ふ～ん」

ユキは歩と文也の顔を交互に見た

「それ……」

そう言つて文也は歩の手を握る

「ひやつて寒こののを理由にして、

歩は、昔のように顔を赤らめた

ମୁଦ୍ରଣ

「ヨキもパパとおでこつなぐ〜...」

歩と文也は、何年たつても、何十年たつても

2人仲良く手を繋ぎながら、雪景色の中を歩いていた

## あとがき

兄弟だから、  
恋をしてはいけナイ  
なんて決まりはどこにもない……

実際アタシもそうです……

歩のような恋をしています

でも、絶対叶わない恋なんて無いと思っています

綺麗事とか、そうゆう訳じゃなくて

叶わない  
叶う

貴方が好きな人だって  
人間です

もし、振られたとしても

人は、誰でも心変わりがあります

だから

たとえ貴方の好きな人が

本来恋をしてはいけない人だとしても

貴方は、諦める必要なんてない・・・

そもそも、恋をしては、イケナイ人なんて  
この世には、絶対イナイ

だから、歩のような思いをしている女性に

あたしは、心から頑張って幸せになつて欲しいと

心から思つてゐるし

アタシ自身も

頑張らうと思ひます

どんな壁が  
あらうとも

貴方が

貴方の好きな人を想う気持ちが本当のモノなら

乗り越えられるから

歩だって

文也だって

結婚をするまでに色々な困難がありました

これは、

実話です

アタシ自身の話では、無いけれど

義理の兄弟で

3年間親に隠していきながらも

愛し合っている

兄弟がいます

その関係がバレるのも  
時間の問題だとアタシは思いますが

本当にお互い大好きで

けど、みんなに認められる事は無くて・・・

そんな兄弟を見ていて  
この小説を書いたとアタシは思いました

歩と文也も

その兄弟も

貴方と貴方の好きな人も・・・

一生幸せに

ずっと一緒に居られるよう

アタシは応援しています・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3510d/>

---

雪景色

2011年1月12日14時25分発行